

VI 寺院の調査

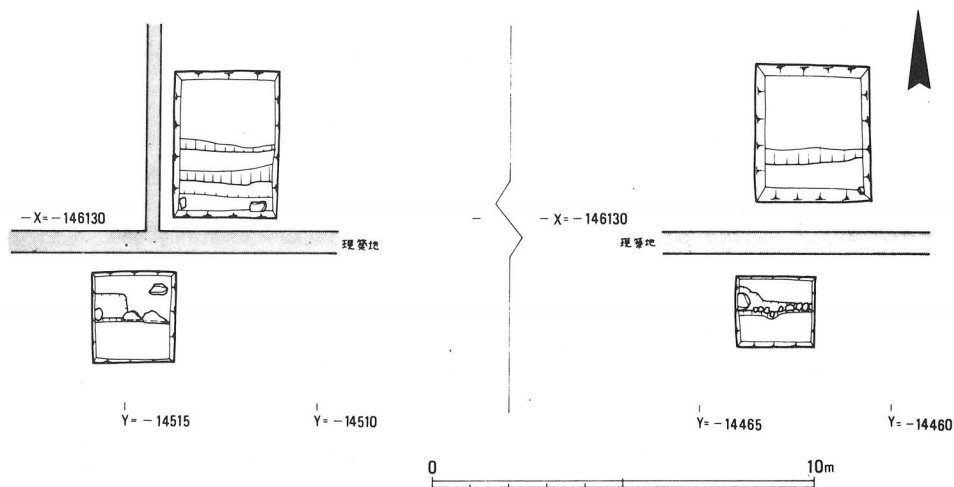
① 東大寺の調査

調査地は奈良市雑司町の東大寺学園校庭内である。同学園は東大寺南大門の西に近接し、校庭南限を画する東西築地塀が創建東大寺の南面大垣とはぼ一致するため、築地塀に接して北側に2ヶ所、南側に2ヶ所、計4ヶ所の発掘区を設定し南面大垣の遺構を一部検出した。

東西築地塀の北側では、現地表下1.6～2.4mで地山となる。この地山の上、発掘区南端に幅約1mの大垣基壇を検出した。基壇は高さ0.6～1.1mまで残り、南が高く、北は急激におちこんでいる。基壇化粧は残らず、基壇積土には遺物を含まない下層と、瓦類を少量含む上層とがある。

基壇の北側は、北でわずかに高くなる平坦面で、北岸は調査できなかったが、大垣北雨落溝と考えられる。溝内には粘土と砂、土が互層に堆積し、堆積土中から多量の瓦類、土器類とともに鉄刀1点が出土した。堆積の上面は北へ下る傾斜面をなし、この面は人頭大の自然石による石敷となっている。

東西築地塀の南側では、現地表下0.7～0.8mで、東西方向の石列を検出した。



第14図 東大寺南面大垣遺構図

石列は南面をそろえて自然石を並べ、石列の南側は一段低くおちこんでいる。

大垣北雨落溝から出土した土器類には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器があり、平安時代中期から末期に属するものである。雨落溝上面の石敷からは鎌倉時代に属する土師器・瓦器が出土した。

瓦類では軒瓦が21点出土した。時代別では、江戸時代2点、鎌倉時代5点、平安時代1点、奈良時代13点で、奈良時代が最も多く、次いで鎌倉時代のものが多い。奈良時代の瓦はいずれも東大寺式である。

奈良時代の大垣基壇については北端しか検出することができなかった。しかし南大門の中軸線をもとに復原すると、大垣基壇の南北幅は6 m（2丈）となり、先年調査した西面大垣の幅と一致する。北雨落溝は平安時代で廃絶し、ついで、石敷を雨落とする築地が築かれたと考えられる。築地塀の南で検出した東西石列については年代を知るだけの遺物を伴わないが、これを築地基壇とすれば、南大門との関係では南北幅3.3 m（1丈1尺）に復原することができる。

② 薬師寺宝積院の調査

薬師寺宝積院庫裡新築工事に伴う事前調査として、昭和53年12月11日から同25日まで、約90㎡の調査をおこなった。場所は創建薬師寺の北門礎石が残っている所のすぐ東南の一画で、奈良時代は苑院であったと推定され、寺蔵古図によれば17世紀中頃には宝積院が建てられた所である。

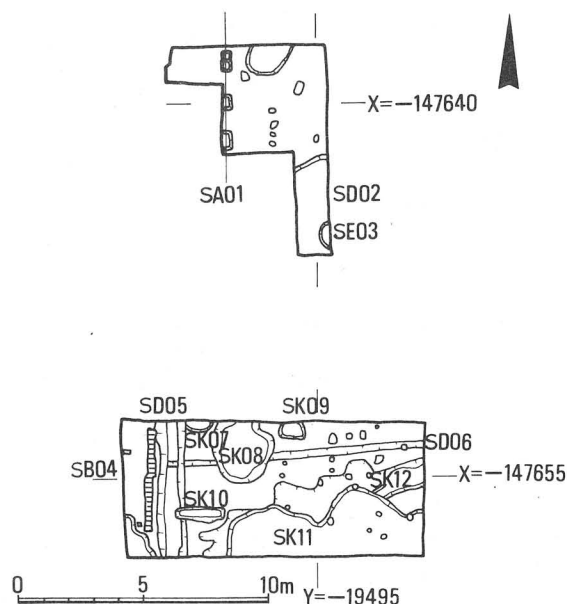
調査は南北2ヶ所のトレンチを設定しておこなった。北トレンチでは現地表下約30cmで柵・溝・井戸などを検出した。柵SA01は8尺等間、2間以上で奈良時代の遺構と考えられる。北西部は近世の土塀が崩壊した部分であるが、奈良時代の北門に関連する遺構は検出しなかった。南側では近世の東西溝SD02と溝埋土を掘り込んだ井戸SE03を検出した。

南トレンチは、地表下約30cmで灰褐砂質土を主とする厚さ約20cmの整地層があり、その下は灰色細砂を主とする地山である。灰褐砂質土面では宝積院門基壇と基壇に伴うと考えられる南北溝SD05、基壇下に入る中世の東西溝SD06のほか

土壌 6 基と多数のピットを検出した。ピットには角杭・丸太杭の遺存するもの各 1 個と、穴の底に瓦を詰めたもの 3 個があった。瓦の入った穴は中世以前の何らかの建築物に関係するものと考えられる。土壌 SK11 は平安時代後期から鎌倉時代にかけての多量の瓦器・土師器を含んでいた。門基壇は江戸時代の軒平瓦を含む瓦を小羽立てて化粧をし、東側柱礎石が遺存していた。門の間口は 2.9 m であった。下層の地山面では古墳時代の蛇行する南北溝（幅 1.5 m、深さ 0.3 m）と東西溝（幅 1.6 m、深さ 0.3 m）を検出した。

遺物の大半は土壌から出土したものである。瓦は整理箱で 2 箱分が出土した。薬師寺の創建時軒平瓦（6641-I 型式）2 点及び奈良時代の軒平瓦（6664-O 型式）1 点、平安時代後期の軒丸瓦 1 点及び軒平瓦 3 点が含まれている。土器類は平安時代後期から鎌倉時代にかけての瓦器の碗・皿などと、土師器の皿・甕などが整理箱で 7 箱分出土した。SA01 柱掘立方埋土からは奈良時代の須恵器片、門基壇たち割り部の灰褐砂質土層から奈良時代の高杯、下層蛇行溝から古墳時代の土師器、SK09 からは羽釜がそれぞれ出土した。

奈良時代の遺構としては SA01 以外には検出されず、遺物も非常に少ない。平



安時代後期から鎌倉時代にかけての食器類が多量に出土することは、この辺りが居住空間化したことを示すものと考えられる。

第15図 薬師寺宝積院調査遺構図

③ 法隆寺西南院の調査

昭和53年度から昭和58年度にかけて、国庫補助を受けた法隆寺境内全域の防災工事が実施されることとなり、現状変更に伴う事前の発掘調査を当研究所と橿原考古学研究所が共同して行うこととなった。今年度は、消防道路予定地の調査を昭和53年12月7日～昭和54年1月25日の期間にわたって実施した。調査地は、現西面大垣の内側に沿った平均幅4m×全長70mの約280㎡である。

検出した遺構は、基壇建物1棟、築地1条、井戸3基、溝10条などで、大別して6期に分けることができる。

第Ⅰ期 東西溝SD 005、小ピットSK 004がある。SD 005はトレンチ内から始まりトレンチ東外へ延びる溝で、幅50cm、深さ50cmである。SD 005からは奈良時代の土師器杯・皿・鉢・壺の完形に近い遺物が一括出土し、SK 004からも須恵器の壺が出土した。

第Ⅱ期 明確な遺構はいずれもトレンチ北半部に集中している。最も北に基壇建物SB 010がある。基壇は傾斜する地山面を削り出して水平面をつくり、その上に瓦や須恵器を多少混入した灰白色粘土を積み上げている。北半部は削平されて積土はなく地山が直接露出している。残存高は基壇北面が約20cm、南面では50cmである。基壇南北幅は基底部で約9mを測る。基壇南側には二本の東西溝SD 011・012があるが、いずれかが雨落溝であろう。

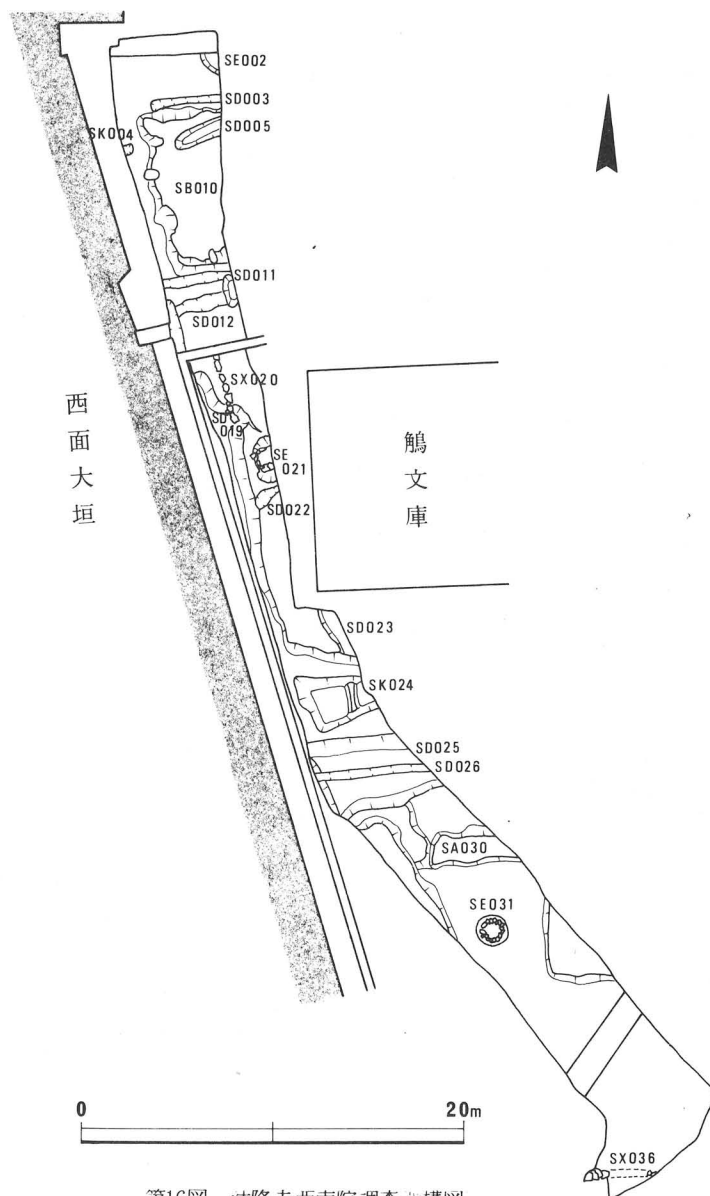
SB 010の南約4mから南へ延びる南北溝SD 019がある。トレンチの西壁に沿って辛うじて東肩を検出したもので、約20m南下してトレンチ外へ延びている。方位は西面大垣にほぼ沿っている。この溝の北端東側には、石積遺構SX 020が溝と並行している。一段の石列が南北に4mつづいて、SD 019にとりつく。この部分はSD 019の底から石が積まれていて、上段は一段低くなっている。あるいは、後述の井戸SE 021からの排水口としていたのであろうか。

SE 021は方形の石積井戸で西半分を検出した。井戸上面に数個の石が残るが、井戸内の積石は上端から80cm下まで崩壊していた。下方へ積石三段分を検出したが完掘はできなかった。

第Ⅱ期の遺構の年代は平安後期に比定できる。ただし、基壇建物 SB 010 は層位的にみて、江戸時代まで存続していたようである。

第Ⅲ期 東西方向につづく築地基底部と考えられる SA 030 がある。基底幅は約 1.8 m で、築地に伴う施設は残っていない。

SE 031 は円形の石積の井戸で、内径約90cm、上端から90cm下に角材で土台を



第16図 法隆寺西南院調査遺構図

組み、その上に石を積んでいる。角材から下は素掘りのままである。積石の間には偏行唐草文軒平瓦一点を含んでいる。他にSD 023 もこの時期である。

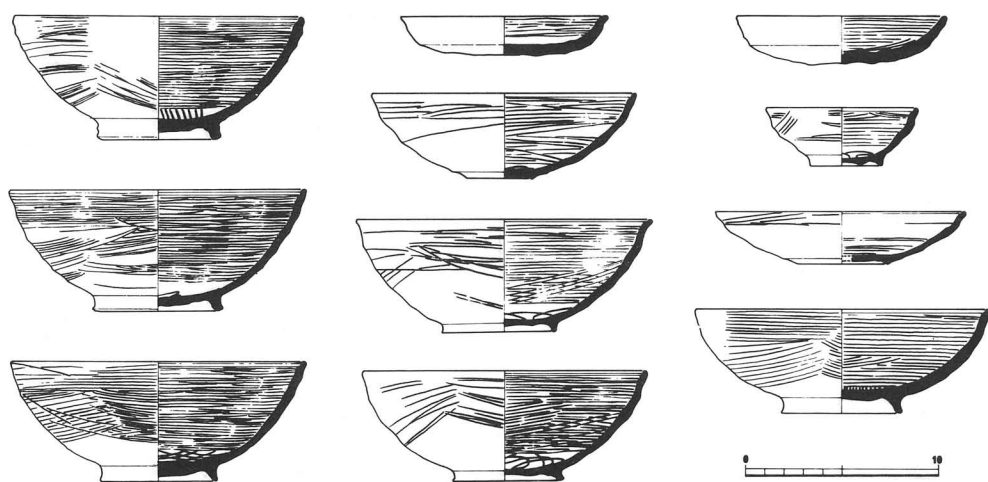
トレンチの南半部に遺構の集中する第Ⅱ期の状況は、築地塀 SA 030 を境にして南北の土層に著しい相違がある。SA 030 以南には、炭化物を多量に含んだ砂層が幾層も重なって堆積しているが、以北には全く見られない。また、井戸 SE 031 の上面の石は明らかに火災に遭った痕跡を残している。SA 030 の南側の一面は瓦器の年代からみて13C 後半までに、火災によって廃絶したものであろう。

第Ⅳ期 築地塀 SA 030 の北に東西に走る大溝 SD 025 と、SE 002 がある。

第Ⅴ期 顕著な遺構としては、二条の溝 SD 003 ・ 026 だけである。

第Ⅵ期 鵜文庫から南一帯を厚く整地して石垣 SX 036 がつくられている。40～50cm の大きな石を四～五段積み上げて、約 1 m の高さの石垣にしたもので、南に面をそろえている。この石垣を西へ延長すると丁度西面大垣が東にわずかに屈曲して延びてきた突端にとりつく位置にある。

遺物 瓦類では丸・平瓦が最も多い。軒瓦は十五点である。軒瓦中には二種類の重弧文軒平瓦が含まれている。法隆寺で重弧文の出土を見たのははじめてである。土器類としては土師器・須恵器・瓦器・磁器がある。土師器が最も多く、ついで瓦器が多い。



第17図 法隆寺出土瓦器

まとめ 調査区は、天明の「伽藍境内大絵図」、寛政の「法隆寺惣境内図」の二つの古図によれば、子院西南院にあたる場所である。西南院の創立については詳らかにしないが、「法隆寺別當次第」には元享元年五月に中院と西南院が合戦したとの記事がみえる。これによって鎌倉時代の後半には西南院の存していたことが知れる。先述の古図中には、西南院本堂が西北隅に描かれているが、今回検出した基壇建物SB 010をその規模からみてこの本堂にあてることができる。

従来から、法隆寺の寺域を南に拡げて、現在のように築地で囲うようになったのは平安後期と考えられ、西大門も「別當次第」によれば長元年間の造立と記されている。したがって、これに近い時期に西南院が創立されたとみれば、出土遺物の年代観とも符号する。また、SB 010は先述のごとく第Ⅱ期以降にも存続していたとみられるので、江戸時代まで残って古図に描かれたのであろうか。

ところで、第Ⅱ期に南北二区画がすでに、成立していたかどうかは明確でないが、少なくとも第Ⅲ期には築地SA 030によって区画されていた。しかもそれぞれに井戸を有していることは、両区域が別の子院であった可能性を示している。おそらく西南院は北の一画にあたろう。寛政の古図には西南院の南に東西の築地が走り、南の一画には明府社が描かれていて、すでに子院にあたる建物はみられない。この築地をSA 030とすると、かつての子院の廃絶した跡地を踏襲して明府社がつくられたとみることができる。ちなみに「別當次第」には、永仁四年に「冥符社」を新造した記事がみえる。

また、天明の古図に描かれる西南門東側の東西築地は、石垣SX 036の北側には本来築地が存在したことを示すものであろう。

なお、今回の調査では、鵜文庫の北側の位置で、トレンチを西に拡張し、西面大垣との関係を検討したところ、現築地地覆石下50cmで、当初の基底部と思われる一列の地覆石列を検出した。地覆石は基壇建物SB 010や、第Ⅱ期の遺構を検出した地山面よりは40cm程上層にある。年代を限定する資料は得られなかったが、層位的にみて江戸時代に近い時期と考えることができる。ちなみに、現築地架構部に用いられた古部材からは慶長大修理のものと考えられている。

④ 唐招提寺戒壇の調査

この調査は唐招提寺戒壇上にストーパーを建設するため、その基礎工事に際して行われたものである。調査は昭和53年5月29日から開始し、同年6月22日に終了した。なお、その後も工事の進展に伴い数度にわたり補足調査をおこなった。

唐招提寺戒壇の創建年次については、同寺の草創に伴うものとする説と、弘安7年を創建とする説の二説がある。「招提千歳傳記」によれば、応永年間にも戒壇の補修を行っているが、中世以降の状況については不明である。近世では慶長元年の大地震によって、他の堂舎とともに戒壇堂も倒れ、元禄8年に將軍綱吉の生母桂昌院の寄進による再興工事が始まり、同11年9月に落成法要が営まれた。現在の戒壇院はこのときの姿をとどめるものであるが、このとき建立された覆堂は嘉永元年の火災で焼失し、その後戒壇は大正年間に修理の手が加えられた。

戒壇の外観は三段からなり、最下段は正方形基壇で一辺 16.0 m、高さ 0.75 m、南面に東西 11.2 m、南北 2.5 m の張出しをもつ。戒壇本体は基壇中央部の方 11.0 m、高さ 2.3 m の部分で二層をなし、第二層の上面中央部には 2.2 m、高さ 0.1 m 程の花崗岩製切石を組んだ結界石をのせる。これは戒壇第三層にあたる。

遺構 戒壇封土の土層は下層から地山、版築土層、元禄期盛土層、大正修理土層である。地山は上部では黄灰褐の粘質土であるが、下方にゆくにしたがい土質はシルト状となる。壇の中央部では周囲の地山面より 1.2 m 程高くほぼ水平であるが、戒壇第二層の地覆石下方でゆるやかにさがり、再び平坦になって基壇端まで延びる。基壇敷石は地山面上に厚さ 5 cm 程のしっくい敷いて据え、元禄再興戒壇堂の向拝にあたる南面の張出基壇も、地山を削出して造成している。

版築土層の土質は地山の上層部と非常によく似ている。地山を削出した中央部の高まりを覆うように積む。地山面から 0.6 m ほどは数層に粗く積み、その上方は細かい版築状となる。中央部が最も厚く、全体で約 1 m あり、上面は周囲にむかってゆるやかに湾曲している。周縁部は戒壇第二層基壇化粧のウラゴメに削りとられている。この版築土層と上層の元禄期盛土層の間に厚さ 0.1 m の暗黄褐土層がみられる。

元禄期盛土層は厚さ 0.6 m 程で瓦片を多量に含む黄褐色土と、灰褐色の粘土斑を混じえる粘質土の二層がある。

大正期修理土は厚さ 20～30 cm で暗黄褐粘質土と灰黄褐粘質土の二層に別れる。

元禄期盛土上面で、元禄再興の戒壇堂の遺構と思われる礎石抜取跡、それにスリバチ状の掘り込みを検出した。また暗黄褐土上面で小建物跡、土塋各 1、小ピット多数を検出した。

元禄期戒壇堂の遺構は径 50 cm、深さ 15 cm 程の方形あるいは円形の浅いくぼみ 4 個で、奈良県所蔵の戒壇実測図にみえる戒壇第二層上面の礎石配置と一致する。

スリバチ状遺構は上端の径約 2.5 m、深さ 0.6 m で性格不明である。この位置が戒壇第三層の直下にあたるので、そのための地業と考えられなくもないが、特に丁寧な仕事をしているわけでもなく、特別の埋納品を納めた形跡もない。

小建物は 1 間×1 間で、暗黄褐土が周囲にむかって落ち込む肩のところ、東南東北、西南の 3 つの隅で、長径 0.6～0.75 m、短径 0.4～0.5 m、厚さ 10～25 cm ほどの自然石の礎石 3 個を検出した。西南隅は抜取られている。版築土層を浅く掘込んで礎石を据え、その上面にそろえて暗黄褐土を積む。礎石間の距離は東西、南北とも約 2.8 m である。

暗黄褐土面を切り込んで、不整形な土塋 1 個と小ピット数個がある。土塋からは炭化物とともに小埴仏、鉄製・銅製の飾金具、釘、鋌、金箔などが出土し、恐らくは厨子の焼滓を廃棄したものと考えられる。小ピットの性格は明らかでないが、このうちのひとつからキセルの吸口が出土した。

出土遺物には瓦・埴仏・土器・金属製品などがある。

瓦埴類では古代から近世に至る瓦片と埴仏が出土した。瓦は元禄期盛土中に多く、特に黄褐粘質土に多量の瓦片が含まれていた。軒瓦は軒丸瓦 7 点、軒平瓦 6 点があり、このうちに緑釉軒丸瓦 1 点が含まれる。6282・6282 G・6236・6236 D・6316 B・6572 型式があり、6572 型式を除けば奈良時代末から平安時代にかけての瓦である。一般の丸・平瓦では緑釉の認められるものが丸・平 1 点ずつあった。埴仏は完形品 4 点、破片を含めて 12 個体分がある。暗黄褐土上面の炭化物を含む

土壙埋土中から出土した。大きさは縦 4.05 cm、横 2.3cm、厚さ 0.4 cm で、蓮華座に結伽状坐する如来像を表面に浮彫りする。天蓋、衣襞など精緻に造出しており様式からは 8 世紀後半と推定される。

土器類には瓦器片、須恵円面硯片、緑釉陶器片がある。瓦器片は元禄期盛土全体に含まれる。いずれも中世以降のものである。円面硯は奈良時代、緑釉陶器片は平安時代のもので元禄期盛土の黄褐色粘質土層から出土した。

金属製品には元禄期盛土・元禄期のウラゴメ土・暗黄褐土層から鉄釘が、元禄期盛土からは鉄鍋の脚が出土した。また、前述のキセルの吸口は積土の時期決定に重要な資料となった。そのほかの金属製品は前記のようにほとんど博仏とともに炭化物層から出土している。

当戒壇の創建時期を発掘の結果から明らかにすることはできなかったが、築成の状況からみて、版築土層とその下の地山の高まりが、創建の戒壇にかかわる封土であることが十分に推測される。

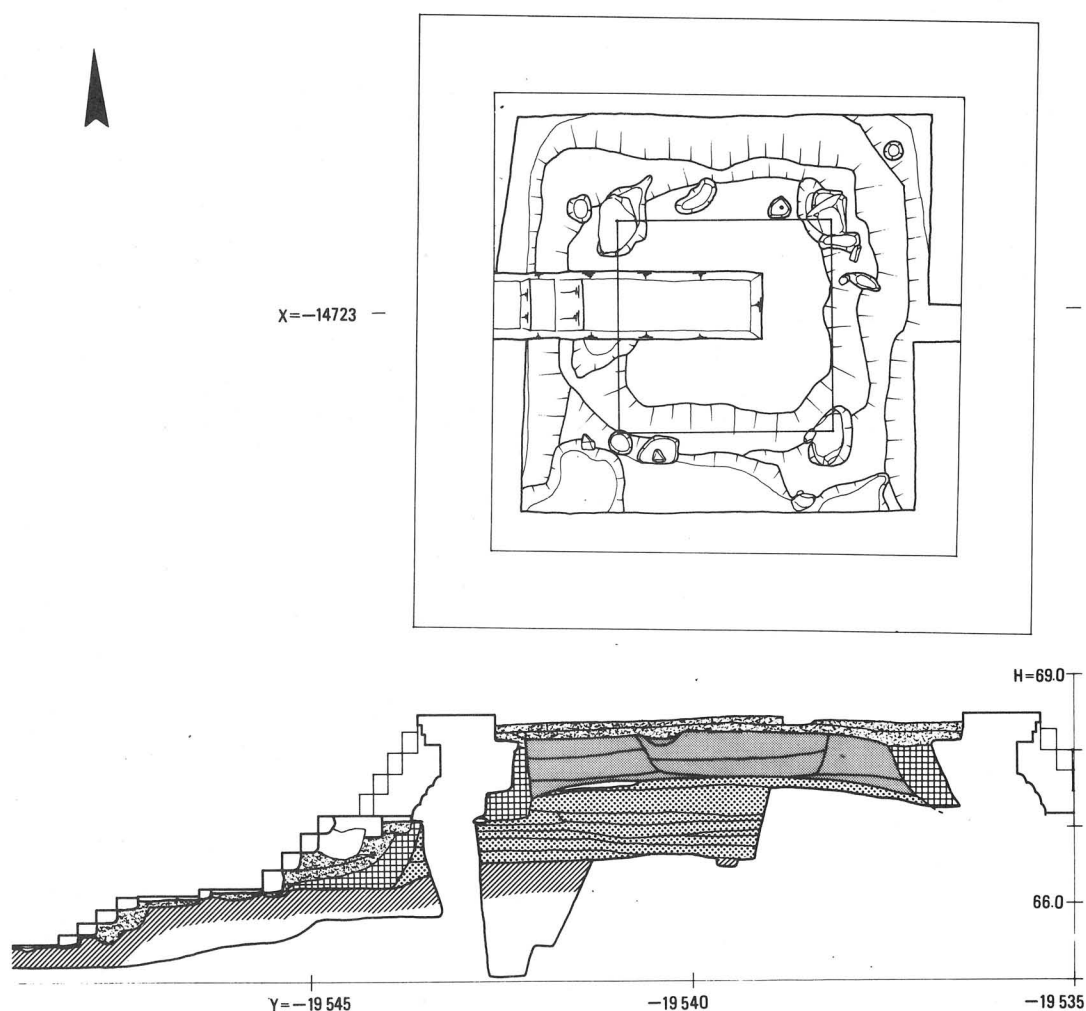
土層の状況や出土遺物から元禄 8 年から同 11 年にかけて行われた戒壇再興工事によって現戒壇の第二層以上は新たに積み加えられたことが明らかになった。このほかの工事としては周囲に築地をめぐらし、四面に門を設けるなど、外観を壮重に整え四周を整備するという戒壇の面目を一新するものであったことがうかがえる。次に、暗黄褐土上で検出した小建物の存在によって、元禄以前の戒壇の高さがこの暗黄褐土上面くらいまでしかなかったことが推定され、現在の戒壇よりはずっと低いものとなる。平面規模についても版築の層が外に向かって湾曲して



第18図 唐招提寺戒壇出土博仏

いる状況からみて現土壇よりそう大きなものではなさそうである。この小建物は礎石の状況から、仮設的な覆屋のようなものが考えられよう。「招提千歳傳記」の戒壇堂の条に見える「文禄五年(慶長元年)大地震。此時殿堂多倒。此殿又倒。久成莓苔之地。僅有小屋覆戒壇耳。」の記事が思いあわされる。

今回の調査によって創建以来の戒壇封土が比較的良好な状態で保存されていることが明らかとなった。また、元禄再興時の工事の様相をほぼうかがい知ることができたのは収穫であった。



第19図 唐招提寺戒壇発掘遺構平面・断面図